第4回 忘れられない看護エピソード
入選
看護職部門

Aちゃんからもらった魔法の笑顔

【土屋（つちや） 操（みさお）・長野県】

わが家の長女が成人式を迎えた。きれいに化粧をし、華やかな着物姿。私には着物姿を見ると、思い出す人がいる。3歳だったAちゃん。

Aちゃんのママは乳がんで、がんは肺に転移していた。乳房の外側にカリフラワー様の塊が多数あり、所々出血している状態だった。Aちゃんは週末になると、ママの所へやって来る病棟の人気者だった。あどけない笑顔に癒やされる半面、ママとAちゃんの間にあまり時間のないことをスタッフの誰もが察知していた。Aちゃんは、「今度お着物着るの」と七五三を楽しみにしていたが、ママは気分の優れない日がだんだん多くなった。「もしかしたら間に合わないかもしれない…」口には出さないものの、スタッフ誰もが同じ思いだった。私もAちゃんの前では笑顔で看護師を演じていたが、「残された時間」と「Aちゃんの七五三」に時間のズレがあることを感じていた。「間に合わない。だけど…そうだ、少し早い七五三をしよう！」

10月、ピンクの着物を着て、薄く化粧をしたAちゃんは、にこにこ顔でママの所へやって来た。殺風景な病室は、画用紙で切り抜いた花や昆虫の絵を飾り付けし、撮影スタジオに変化した。スタッフとジュースで乾杯をした後、Aちゃんは、はにかみながらパパのカメラの前で、ママに抱かれ、3歳の女の子になった。なんのポーズも声掛けも必要なかった。

あの時の魔法の笑顔！　絶対に忘れない！　魔法の笑顔が、Aちゃんとスタッフの思いを一つにしてくれた。Aちゃんは「今行うことの大切さ」と「時間の大切さ」を教えてくれた。ママは11月の七五三を待たず、旅立った。

その後、偶然外来でパパに会った。「入院中は本当にありがとうございました。皆さんと撮った写真が宝物になっています」という感謝と、「今度いつ病院へ行くの？　病院に行けばママに会えるんでしょう？」というまだ3歳のAちゃんの家での様子を聞き、目頭が熱くなった。